

ご案内

年明けの1月14日に、別紙チラシのとおり「第3回神奈川証言集会」を開催します。主旨をご理解いただき、参加をお願いします。

終戦時、中国だけでも200万人をこえる日本軍兵士がいたはずですが。その人たちが帰国後どこまで真実を語り、残してくれたのでしょうか。侵略者としての当事者が真実を語るにはあまりにも大きな苦痛が伴うことでしょう。その苦痛故に語れなかった人も少なくないでしょう。また同時に、侵略戦争の当事者としての反省に至らず、したがって真実を語ることのなかった人もすくなくないのではないのでしょうか。

数は少ないが、侵略戦争に参加した自分の体験を、心からの反省に基づいて真実を語る人たちがいます。「中国帰還者連絡会」に所属していた人たちです。

敗戦と同時に60万人もの日本軍将兵が酷寒のシベリアに抑留されて、強制労働にさらされ、その内6万人が犠牲となった事実は広く知られています。しかし、敗戦から5年を経過してもまだ数千人の日本人将兵がシベリアに残されていました。その中から969名が戦犯として中国に引き渡された事実はあまり知られていません。

この人たちはさらに6年間、中国の撫順戦犯管理所に収容されました。中国の撫順戦犯管理所での環境は充実した設備、3度の米の飯、管理所職員の人道的な応対、その上有り余る自由な時間など、飢えと寒さと強制労働のシベリアでの体験とはあまりにも環境の違いに最初は戸惑ったそうです。だが慣れるにしたがい収容された最初の1年は「遊びほうけた」そうです。

1年が経過し、やがて遊びも飽きて少しずつ考え、討論しはじめました。読み物を要求し、学習し、「あの戦争は正しい戦争だったのか」「誰がどのような目的で開始されたのか」などを考えはじめたのでした。さらに目の前の管理所職員はその多くが侵略戦争時、自らが日本軍に傷つけられ、自分の家族が殺された当事者であることを知り、自ら犯してきた戦争犯罪の心からの反省に至っ

たのでした。心からの反省に至るまでにじつに6年の年月を要したのです。中国政府の「寛大政策」によって罪を大幅に減じられてほとんどの人たちが帰国したのが1956年でした。

帰国したときは、すでに戦後11年を経過して社会は様変わりしていました。生活すらままならぬ環境の中で「中国帰還者連絡会」を結成した。最初は自分たちの生活防衛のための要求をまとめることに比重をおいた運動を開始しました。やがて「日中友好、反戦平和」を柱の運動に発展させ、侵略戦争の真実を営々と今日まで語り継いでこられました。自らの行為を心から反省からしか語れない真実は、話を聞いた多くの人たちの胸に響いてきました。

しかしすでに多くの方が高齢のために亡くなられ、外に出てお話しができる方もほとんどおられなくなりました。今回お呼びする小山さんは数少ない証言者の一人です。87才になる今日まで数多くの証言を行ってこられています。そして今回この9月に、自分が数々の戦争犯罪を行ってきた土地である中国山東省を訪れてこられました。小山さんにとっては「謝罪の旅」でした。人生の終末期に当たってどうしても直接現地の人たちに謝っておかなければならない、という小山さんの強い意志がとらせた行動でした。

土下座をしてでも謝ろうを考えて行った現地では、逆に大歓迎をされたそうです。逆に多くの感動をもらってきたと小山さんは言われます。今回の訪中のできごとについて貴重なお話が聞かせていただけたと思います。

小山さんに横浜までお出かけをお願いすることは、これからはますます困難になると思います。この機会に一人でも多くの皆さんに聞いていただきたく、ご案内申し上げます。

前後しますが、第1部で上映するビデオは中帰連の方たちの証言をコンパクトにまとめた短いものです。5人の登場者の内、すでに4名が亡くなっておられます。衝撃的なお話も収録されています。百聞は一見にしかず、です。ぜひご覧ください。

2007年12月吉日

撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部 代表 松山英司

撫順の奇蹟を受け継ぐ会

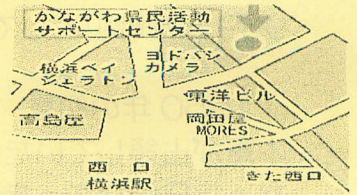
第3回神奈川証言集会

横浜で3回目の中帰連(中国帰還者連絡会)の方の証言集会を開催します。

日時 2008年 1月14日(休) 13時30分より

場所 かながわ県民センター305 (JR横浜駅西口より3分)

資料代 500円



第1部 ビデオ「泥にまみれた靴で」上映、
及び解説

泥にまみれた靴で

— 未来へつなぐ証言 侵略戦争

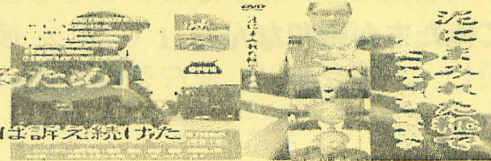


「憲法9条をゆがめるのは戦争をするため」

「過ちを繰り返してはならない」

侵略戦争を体験したかつての兵士たちは訴え続けた

26分・3150円(税込)



5人の登場者の内、4人の方はすでに亡くなられています。貴重な話はますます聞かれなくなります。

第2部 私の体験した戦争犯罪と謝罪の旅

証言者 小山一郎さん(中国帰還者連絡会会員 1920年生)

今回は東京、田端にお住まいの小山一郎さんにお出でいただきます。

今年で87才になられた小山さんは今日まで、自ら犯した戦争犯罪の真実を証言してこられました。小山さんが加わったウサギ狩り作戦と称する「強制連行作戦」のお話には胸がえぐられます。そして今年の9月にご高齢の身を押し、62年ぶりに自分の部隊が駐屯した山東省を訪れました。

自分が行ってきた罪行を考えれば、現地の人たちから胸ぐらを掴まれるくらいのは、と覚悟して行きました。だが待っていたのは・・・思いもよらぬ歓迎でした。小山さんには、中国での加害の体験と今回の中国への謝罪の旅のお話をさせていただきます。

あの戦争の“真実の証言を聞くことのできる最後の機会”は着実に近づいています。この機会にぜひお聞きください。

主催 撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<問い合わせ TEL 046-871-4263 e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp 松山英司>

撫順の奇蹟とは

敗戦後、ソ連軍に武装解除されて60万人もの日本軍将兵たちが酷寒のシベリアへ連行されて強制労働をさらされ、その内6万人が犠牲となった事実は広く知られています。しかし、敗戦から5年後まで残されていた一部の中から969人が戦犯として中国へ引き渡された事実はあまり知られていない。

1950年の初夏、彼らが到着したところは**撫順戦犯管理所**だった。かつて日本軍が占領していた時代の**撫順監獄**で、「抗日分子」への拷問で悲鳴の聞こえなかった日はなかったそうです。皮肉にもそのときの看守長も収容された。

「俺たちは戦犯ではない。」運命の暗転におびえ、自暴自棄になり、抵抗する日本人戦犯たち。戦争が終わってもう5年。**「軍の命令に従っただけで、どうして俺たちが戦犯なんだ。」**しかし、彼らの中の多くの者は戦争中、捕虜や民衆を殺し、食糧を奪い、家々を焼き払い、毒ガスや生物兵器を用いて戦争犯罪を行っていた。

そんな彼らが戦犯管理所に来て驚いたのは、充実した設備に1日3度の食事、そして管理所職員による人道的な待遇でした。さらに自由な時間を与えられ、戦犯たちはそれまで経験したことのない生活を送ることとなります。

しかし、**被害者の痛みを、この戦犯たちが心から理解できる日は来るのか** 戦犯たちを収容し、管理した職員たちは、その誰もが日本軍によって家族を殺され、姉妹を犯され、自ら傷つき、抗日と革命に身を投じた者たちだった。

人道的な待遇と、人生で初めて与えられた、ありあまる時間のなか、やがて戦犯たちの心に変化が生じ始めました。暖かく接してくれる職員たち、彼ら中国の民衆に対して自分はどんなことをしていたのか。それから戦犯たちの、今に至る、“認罪の旅“が始ったのです。

撫順戦犯管理所に収容されてさらに6年後、認罪が認められたほとんどの戦犯たちは罪を許されて帰国した。彼らは「中国帰還者連絡会」を結成し、「日中友好、反戦平和」と基調とした活動を展開してきた。

撫順の奇蹟を受け継ぐ会は中国帰還者連絡会の精神と事業を受け継ぐために結成しました。

撫順の奇蹟を受け継ぐ会 <http://www.tyuukiren.org/>

撫順の奇蹟を受け継ぐ会は会員加入を歓迎します。